

耐病性品種「TLE-486」を利用したレタス根腐病 レース1の発病抑制



農業総合センター園芸研究所

レタス根腐病は土壌伝染性病害で、一度発生すると急速に被害が拡大して防除が困難となります。本病が発生した場合は他作物を作付けすることが望ましいですが、作物転換ができない圃場では、耐病性品種「TLE-486」の利用が有効です。

耐病性品種による発病抑制効果

耐病性品種「TLE-486」は、レタス根腐病レース1に強い耐病性を有しています（図1、表1）。根腐病が問題となる8月下旬～9月上旬定植の作型においても、発病を抑制する効果が期待できます。

表1 根腐病レース1発生現地圃場における品種「TLE-486」の耐病性¹⁾

年度	圃場	品種 ²⁾	定植日	調査株数 (株)	発病株数 (株)	発病株率 (%)
H23	A	TLE-486	8/28	448	1	0.2
		サウザー		448	90	20.0
H24	B	TLE-486	8/21	628	13	2.1
		OGR326		628	344	54.8
	C	TLE-486	8/27	704	11	1.6
		OGR326		520	290	55.8
H25	D	TLE-486	8/26	442	7	1.6
		サーマルスター		512	35	6.8

1) 外部病徴(外葉の萎凋、奇形葉)による発病調査

2) 「TLE-486」は耐病性品種、「サウザー」、「OGR326」、「サーマルスター」は慣行品種



図1 品種の違いによるレタス根腐病の発病差異
左ベッドが耐病性品種「TLE-486」
右ベッドが慣行品種「OGR326」

耐病性品種の栽培特性

耐病性品種「TLE-486」は高温期の結球性に優れる反面、地温の変化に対して非常に敏感なため、8月下旬定植の作型では、慣行の白黒ダブルマルチ栽培では収量が低下する傾向にあります。しかし、反射強化マルチを使用すると、慣行マルチで慣行品種を栽培した場合よりも規格外品が減少し、収量が得られます（表2）。反射強化マルチによって地温の上昇が抑えられ、中肋突出やタコ足などの障害の発生が軽減されます。これにより、慣行栽培と比較して、資材費の上昇分を考慮しても所得の増加が見込めます。

表2 マルチ資材の違いが秋どりレタスの収量・品質に及ぼす影響¹⁾

品種	マルチ 資材	調製重 (g)	障害被害度 ²⁾		A品球 発生率 (%)	A品 換算収量 (kg/ 10 a)
			中肋突出	タコ足		
TLE-486	反射強化	478	32	14	72	2,560
	白黒ダブル	419	76	39	53	1,646
サーマルスター	反射強化	445	40	4	83	2,740
	白黒ダブル	440	52	18	67	2,187

1) レタス根腐病に汚染されていない所内圃場(8月26日定植)での試験。

2) 障害被害指数 0;発生なし 1;軽微 2;中程度 3;重度 障害被害度: Σ (指数×被害株数) / (3×調査株数) × 100

活用上の留意点

- 1) 本県で発生しているレタス根腐病にはレース1とレース2の2種類があります。「TLE-486」はレース2に対する耐病性がないため、圃場で発生しているレースを確認する必要があります。
- 2) 本成果のみだけでなく、健全苗の育成、圃場排水性の改善、輪作体系の導入等の総合的な対策を講じましょう。